

平成25年3月期第1四半期 決算説明会Q&A

【ビジネス状況】

Q: 第1四半期の実績は計画に対してどうだったのか

A: 第1四半期はアジアを中心とした海外市場の堅調に加え、日本市場でのスマートフォン関連投資で想定以上に需要が強く出た。第1四半期は短期的に上振れたが、年間での見通しは計画通り進捗していると考えている。

Q: モバイル計測ビジネスのうち、開発用途／製造用途の比率、3G/LTEの構成比を教えてください

A: 計測事業の第1四半期売上高のうち、約50%がモバイル市場向けである。そのうち、開発用途と製造用途はほぼ半分ずつである。開発用途はLTEが中心、製造用途は3Gが中心で、一部LTE向けが含まれている。

【今期見通し】

Q: 第2四半期の受注状況に関して、トレンドに変化はあるか

A: 7月は第1四半期の状況から大きな変化はないが、8月以降は季節性も含め受注は落ち着く方向と考えている。

Q: 受注増加に関連して、生産キャパシティに問題はないか

A: 現時点で問題になる状況ではない。

Q: IFRS基準での2Q以降の四半期毎の利益率をどう見ているか

A: 四半期ベースでなく、通期で目標設定している。計測事業では20%の営業利益率を目標としている。

【事業環境・市場動向】

Q: LTEの世界的な進展状況とLTE計測ビジネスの見通しについて教えてください

A: LTEを商用化する通信事業者は増加しており、FDD-LTEに加え、今後TDD-LTEの導入が本格化していると考えている。LTE関連の計測ビジネスは、中長期で成長していると考えている。一方で、3GからLTEへの移行が進むため、全体のビジネス規模が大きく変化することは見込んでいない。

Q: LTE Advancedの現在の状況と見通しについて教えてください

A: 開発はスタートしており、顧客と開発ロードマップを共有しながら進めている。1年前と比較すれば、案件は増加する傾向にある。来年以降に本格的な需要が出始めると考えている。

Q: 競合のLTE開発市場参入の動きがあるようだが、競争環境に変化は現れているか

A: 現時点で急激な環境変化は認識していないが、競合の動向は注視している。

Q: スマートフォンのアプリケーション開発用テストの成長性や競合に対する参入障壁について教えてください

A: アプリケーション開発用テストは、スマートフォンのバッテリー消費やデータスループットなどをテストする計測器であり、日本市場を中心に引合いは堅調に推移している。今後主要機種の一つとして育成していく。技術的には競合他社でも実現可能であるが、試験環境の効率化に関する提案力など、サポートを通じた顧客との関係構築が重要であり、その点で当社は先行していると考えている。

【その他】

Q: キャッシュが積み上がっている状況で、株主還元に関する考え方を教えてください

A: 配当方針として純資産配当率(DOE)を向上させることを基本としている。IFRS適用により、純資産が減少するが、4-5%の水準をターゲットとしている。キャッシュについては、生産能力増強に向けた投資などの経営インフラ強化や有利子負債の圧縮に充当する考えである。

Q: IFRSベースでの前年4Qの利益率が低いのは季節的な要因があるのか(プレゼン資料スライド9参照)

A: 前年4Qは日本基準での特別損失約22億円をIFRSでは営業内費用に参入したため、営業利益を押し下げる要因となった。今期はそうした費用の計上は見込んでいない。